

日蓮大聖人御書全集

きょうぎょうしやうごしよ

教行証御書

新版  
1668  
ゝ  
1677

きようぎようしよう(しよ

# 教行証御書

ぶんえい ねん がつ にち さんみぼう

文永12年('75) 3月21日\* 三位房

そ しょうぞうにせんねん しょうじよう ごんだいじよう じえ

夫れ、正像二千年に小乗・権大乘を持依して、その功

い しゆぎよう だいたい やくあ

を入れて修行せしかば、大体その益有り。しかりといえど

かれがれ きようぎよう しゆぎよう ひとびと じえ きようぎよう

も、彼々の経々を修行せし人々は、自依の経々にして

やく う おも ほけきよう ころ さぐ いちぶん

益を得と思えども、法華経をもつてその意を探れば、一分

やく ゆえん ほとけ ざいせ ほけきよう けちえん

の益なし。所以はいかん。仏の在世にして法華経に結縁せ

き じゆくひ よ えんきじゆんじゆく もの ざいせ

しが、その機の熟否に依り、円機純熟の者は、在世にし

ほとけ な こんきみれつ もの しょうほう たいてん ごんだいじよう

て仏に成れり。根機微劣の者は、正法に退転して権大乘

きよう じようみよう しやく かんぎよう にんのう はんにやきようとう しようか

経の浄名・思益・觀經・仁王・般若經等にしてその証果

と ざいせ しようほう きよう ぎよう

を取れること在世のごとし。されば、正法には教・行・

しよう みつ けんび ぞうほう きよう ぎよう あ しよう

証の三つともに兼備せり。像法には教・行のみ有つて証

な

無し。

いま まつぽう い きよう あ ぎよう しよう な ざいせけちえん

今、末法に入つては教のみ有つて行・証無く、在世結縁

ものいちにん な ごんじつ に き う とき

の者一人も無し。権実の二機ことごとく失せり。この時は、

じよくあく とうせい ぎやく ぼう ににん はじ ほんもん かんじん

濁悪たる当世の逆・謗の二人に、初めて本門の肝心・

じゆりようほん なんみようほうれんげきよう げしゆ よ

寿量品の南無妙法蓮華經をもつて下種となす。「この好き

ろうやく いまとど お なんじ と ふく い

良薬を、今留めてここに在く。汝は取つて服すべし。差え

うれ

じと憂うることなかれ」とは、これなり。

ないおうかこ いおんのうぶつ ぞうほう さんぼう し ものいちにん な

乃往過去の威音王仏の像法に、三宝を知る者一人も無か

ふきようぼさつしゆつげん きようしゆと お たま にじゅうしじ

りしに、不輕菩薩出現して、教主説き置き給いし二十四字

いっさいしゆじよう む とな か にじゅうしじ

を一切衆生に向かつて唱えしめしがごとし。彼の二十四字

き もの いちにん な ふきようだいじ あ やく え

を聞きし者は、一人も無くまた不輕大士に値つて益を得た

すなわ さき もんぼう げしゆ ゆえ いま

り。これ則ち前の聞法を下種とせし故なり。今もまたかく

かれ ぞうほう じよくあく まつぼう かれ しよずいき

のごとし。彼は像法、これは濁悪の末法。彼は初随喜の

ぎようじや みようじ ぼんぷ かれ にじゅうしじ げしゆ

行者、これは名字の凡夫。彼は二十四字の下種、これはた

ごじ とくどう じせつこと じようぶつ しょせん

だ五字なり。得道の時節異なりといえども、成仏の所詮は

ぜんたい おな 全体これ同じかるべし。

と い かみ あ 問うて云わく、上に挙ぐるところの正・像・末法の教・

ぎよう しようおのおのべつ

なん みようらくだいし

まつぼう

はじ

みようり

行・証 各別なり。何ぞ妙楽大師は「末法の初め、冥利

な だいきよう るぎよう

とき

よ

しやく

無きにあらず。しばらく大教の流行すべき時に抛る」と釈

たも

し給うや、いかん。

こた

い

とくい

い

しようぞう

やく

え

ひとびと

けん

答えて云わく、得意に云わく、正像に益を得し人々は顕

やく

ざいせけちえん

じゆく

ゆえ

いま

まつぼう

はじ

益なるべし、在世結縁の熟せる故に。今、末法には初めて

げしゆ

みようやく

しようじよう

ごんだいじよう

にぜん

しやくもん

下種す。冥益なるべし。すでに小乗・権大乘・爾前・迹門

きよう

ぎよう

しよう

に

げん

しようか

もの

な

の教・行・証に似るべくもなし。現に証果の者これ無し。

みようらく しやく

みようやく

ひと

し

み

妙樂の釈のごとくんば、冥益なれば人これを知らず見ぞ

るなり。

と い まっぼう かぎ りようやく し きようもん あ

問うて云わく、末法に限って冥益と知る經文これ有り

や。

こた い ほけきようだいしち やくおうほん い きよう

答えて云わく、法華經第七の藥王品に云わく「この經は

すなわ えんぶだい ひと やまい ろうやく ひとやまい あ

則ちこれ閻浮提の人の病の良藥なり。もし人病有らんに、

きよう き え やまい すなわ しようめつ ふろうふし

この經を聞くことを得ば、病は即ち消滅して、不老不死

とううんぬん みようらくだいしい のち べひやく

ならん」等云々。妙樂大師云わく「しかるに後の五百は、

いちおう したが まっぼう はじ みようりな

しばらく一往に従う。末法の初め、冥利無きにあらず。し

ばらく大教の流行すべき時に抛る。故に五百と云う」等

うんぬん

云々。

と い なんじ ひ きようもん しやく まつぼう

問うて云わく、汝が引くところの経文・釈は、末法の

はじめ五百に限ると聞こえたり。権大乘経等の修行の時節

はなお末法万年と云えり、いかん。

まつぼうまんねん い

はなお末法万年と云えり、いかん。

こた い さき しやく いちおう したが

答えて曰わく、前の釈すでに「しばらく一往に従う」

い さいおう まつぼうまんねん るぎよう てんだいだいし かみ

と云えり。再往は末法万年の流行なるべし。天台大師、上の

きようもん しやく どうじだいやく と

経文を釈して云わく「ただ当時大利益を獲るのみにあら

のち ごひやくさい とお みようどう うるお どううんぬん まつぼうまん

ず、後の五百歳、遠く妙道に沾わん」等云々。これ末法万

ねん さ きょうしやく

年を指せる経釈にあらずや。法華経第六の分別功德品に

ほけきようだいろうく ふんべつくだくほん

い あくせまつぼう とき よ きよう たも あんらくぎようほん

云わく「悪世末法の時、能くこの経を持たば」。安樂行品

い まつぼう なか きよう と ほつ

に云わく「末法の中において、この経を説かんと欲す」。

みな まつぼうまんねん きようもん かがれ きようぎよう せつ

これらは皆、末法万年という经文なり。彼々の経々の説

しじゅうよねん しんじつ あらわ

は「四十余年にはいまだ真実を顕さず」なり。あるいは

けつじゅうしや こころ よ えゆう がた

結集者の意に拠るか。依用し難し。

つたな しよしゆう がくしや ほけきよう げしゆ わす さん ご

拙いかな諸宗の学者、法華経の下種を忘れ、三・五の

じんてん むかし し じゆんえん みようきよう す しようじ く

塵点の昔を知らず、純円の妙経を捨ててまた生死の苦

かい しず えんきじゆんじゆく くに しょう う

海に沈まんことよ。円機純熟の国に生を受けていたずら



むけん だいじよう かえ ふびん もう な  
に無間大城に還らんこと、不便とも申すばかり無し。

こんろんざん い もの ひと たま と ひんこく かえ  
崑崙山に入りし者の一つの玉をも取らずして貧国に帰り、

せんだんりん い せんふく ふ がりやく ほんごく かえ もの こと  
梅檀林に入つて瞻蔔を踏まずして瓦礫の本国に帰る者に異

ならず。第三の卷に云わく「飢えたる国より来つて、たち  
だいさん まき い う くに きた

まちに大王の膳に遇うがごとし」。第六に云わく「我がこの  
だいおう ぜん あ だいろうく い わ

ど あんのん わ じようど やぶ とううんぬん  
土は安穩にして、我が浄土は毀れず」等云々。

じよう い なんもん い にぜんとうぶん とくどう とううんぬん  
状に云わく、難問に云わく「爾前当分の得道」等云々。

ねはんぎようだいさん ぜんなんし ま さ しゆじゆう もん た  
涅槃經第三の「善男子よ。応当に修習すべし」の文を立

つべし。これを受けて弘決第三に「いわゆる、久遠に必ず  
う ぐけつだいさん くおん かなら

だいな え にぜん しよきよう とくどう もの

大無くんば」と会して、爾前の諸經にして得道せし者は、

くおん しよきよう よ い いちぶん やく な

久遠の初業に依るなるべしと云つて、一分の益これ無きこ

じじよう のち めつご ぐきよう

とを治定して、その後、滅後の弘經においてもまたまたか

しろうどう とくやくしろうか ひと ざいせ けちえん よ

くのごとく、正像の得益証果の人は在世の結縁に依るなる

とううんぬん かれ なんと にぜん とくどう い

べし等云々。また彼が何度も爾前の得道を云わば、無量義經

しじゅうよねん きようぎよう ほとけわれ しんじつ あらわ

に四十余年の経々を、仏我と「いまだ眞実を顕さず」

と たま われ みようじ ほんぷ ぶっせつ よ

と説き給えば、我らがごとき名字の凡夫は仏説に依つてこ

じようぶつ せい そうら にんし ことば むよう ねはんぎよう

そ成仏を期すべく候え、人師の言語は無用なり、涅槃經に

ほう よ にん よ と おお せい

は「法に依つて人に依らざれ」と説かれて大いに制せられ

そつら

た

しんじつ

あらわ

うす

て候えばなんと立てて、「いまだ真実を顕さず」と打ち捨

うす

しょうじき

ほうべん

す

せそん

ほうひさ

のち

て打ち捨て、「正直に方便を捨つ」「世尊は法久しくして後」

きようしやく

ひ

そう

い

なんどの経釈をば、秘して左右なく出だすべからず。

なんもん

い

とくどう

しよせん

にぜん

ほけきよう

おな

また難問に云わく「得道の所詮は爾前も法華経もこれ同

ゆえ

かんぎよう

おうじよう

ほか

れい

じ。その故は観経の往生、あるいはその外、例のごとし」

とううんぬん

等云々。

しんじつ

あらわ

ほか

け

みようじ

また、「いまだ真実を顕さず」、その外「ただ仮の名字の

とう

た

うんぬん

どうじ

きよう

みをもつて」等と立つべし云々。また「同時の経あり」と

い

ほっしほん

いこんとう

せつ

え

げんぎ

云わば、法師品の已今当の説をもつて会すべきなり。玄義の

三、籤の三の文を出だすべし。経釈能く能く料簡して秘

すべし。

一状に云わく、「真言宗」等云々。

答う。彼が立つるところのごとき弘法大師の「戲論」「無明

の辺域」、いずれの经文に依るやと云つて、彼の依経を引か

ば云うべし。「大日如来は三世の諸仏の中にはいずれぞや」

と云つて、「善無畏三蔵・金剛智等の偽りをば汝は知れる

や」と云つて、その後、一行筆受の相承を立つべし。

大日経には一念三千跡を削れり。漢土にして偽りしなり。

びやつけんあ　びる　ちようじよう　ふ　しょうもん　さんぜ

なかんずく僻見有り。毘盧の頂上を蹈む証文は、三世の

しよぶつ　しよせつ　あ　のち　かれい　とううんぬん　た

諸仏の所説にこれ有りや。その後、彼云わく等云々。立つ

だいまんばらもん　こうざ　あしとううんぬん　かれ

べし、大慢婆羅門が高座の足等云々。彼これ、かくのごと

しだい　きようもん　ろんもん　い　とううんぬん

き次第、いかなる経文・論文にこれを出だすやと等云々。

ほか　つね　おし　もんだうたいろん

その外、常に教えしごとく問答対論あるべし。たとい、い

しゅう　しんごんしゅう　ほうもん　い　しんごん　びやつけん

かなる宗なりとも、真言宗の法門を云わば、真言の僻見

せ　そうつろう

を責むべく候。

つぎ　ねんぶつ　どんらんほつし　なんぎよう　いぎよう　どうしやく　しょうどう　じようど

次に、念仏の曇鸞法師の難行・易行、道綽が聖道・浄土、

ぜんどう　ぞうぎよう　しやうぎよう　ほうねん　しやへいかくほう　もん

善導が雑行・正行、法然が捨閑闍拋の文、これらの

ほんきよう　ほんろん　たず

きよう

ごんじつ

にきようあ

本経・本論を尋ぬべし。経において権実の二経有ること、

れい　ろん

つうべつ　にろんあ　こくびやく

例のごとし。論においても、また通別の二論有り黒白の

にろんあ　ふか　なら

か　えきよう　じようどさんぶきよう　なか

二論有ること、深く習うべし。彼の依経の浄土三部経の中に、

とう　しよせつ

ひと　ねんぶつあ　みだとう

かくのごとき等の所説ありや。また人ごとに念仏阿弥陀等

さん

さき

せん

わかんりようこく

これを讃す。また前のごとし。詮ずるところ、和漢両国の

ねんぶつしゆう　ほけきよう　どうぎよう

しやへいかくほう

ほんきよう

ほんろん

念仏宗、法華経を雑行なんど捨閉閣抛する本経・本論を

たず　たし

きようもん

ごんきよう

尋ぬべし。もし慥かなる经文なくんば、かくのごとく権経

じつきよう　ぼう　かざい　ほけきよう　ひゆほん

より実経を謗ずる過罪、法華経の譬喩品のごとくんば、

あ　びだいじよう　だらく　てんでんむしゆこう　きようりやく　たま

阿鼻大城に墮落して展転無數劫を経歴し給わんずらん。

か しゅう びやくみよう もと

さんぜしよぶつ

みな

しんじつ

彼の宗の僻謬を本としてこの三世諸仏の「皆これ真実な

しやうもん す

つみ げ

しよにん ひやうばん

り」の証文を捨つる、その罪、「実に」と諸人に評判せさ

こころあ

ひと

たれ

じつぴ

けつ

すべし。心有らん人、誰か実否を決せざらんや。しかして

のち

か

しゅう

にんし

は

後に彼の宗の人師をあながちに破すべし。

いっきよう

くいぜ

み

ばんきよう

しやうれつ

し

みれん

一經の株を見て万經の勝劣を知らざること、未練な

もの

うえ

われ

みあき

しやくそん

る者かな。その上、我と見明らめずとも、釈尊ならびに

たほう

ふんじん

しよぶつ

じやうはん

たま

きやうもん

ほけきよう

多宝・分身の諸仏の定判し給える經文、法華經ばかり

かいぜしんじつ

ふしんじつ

みけんしんじつ

いけんしんじつ

ひが

まなこ

皆是真実なるを不真実、未顕真実を已顕真実と僻める眼は、

ごよう

しよけん

おと

もの

ほっしほん

いこんとう

牛羊の所見にも劣れる者なるべし。法師品の已今当、

むりようぎきよう

りやつこうしゅぎよう

みけん しんじつ

無量義經の歴劫修行・未顕真実いかなることぞや。

ごじゅうよねん

しよきよう

しょうれつ

しよきよう

しょうれつ

じょうぶつ

五十余年の諸經の勝劣ぞかし。諸經の勝劣は成仏の

うむ

じかく

ちしょう

りどうじしょう

まなこ

ぜんどう

ほうねん

有無なり。慈覺・智証の理同事勝の眼、善導・法然の

よぎようひき

め

ぜんしゅう

きようげべつでん

しよけん

とうざいどうてん

がんもく

余行非機の目、禪宗が教外別伝の所見は、東西動転の眼目、

なんぼくふべん

もうけん

ごよう

おと

へんぷくちよう

こと

南北不弁の妄見なり。牛羊よりも劣り、蝙蝠鳥にも異なら

ほう

よ

にん

よ

きようもん

きよう

きぼう

ず。「法に依つて人に依らざれ」の經文、「この經を毀謗せ

もん

おそ

たま

あつきにゆうごしん

ば」の文をば、いかに恐れさせ給わざるや。惡鬼入其身し

むみよう

あくしゅ

よ

しず

たも

て、無明の惡酒に酔い沈み給うらん。

いっさい

げんしょう

ぜんむい

いちぎよう

おうなん

おうし

一切は現証にはしかず。善無畏・一行が横難・横死、



こうぼう　じかく　しきよ　あ　さま　まこと　しようほう　ぎようじゃ

弘法・慈覚が死去の有り様、実に正法の行者、かくのご

そうろう　かんぶつ　そうかいきようとう　しよきよう

とくにあるべく候や。観仏相海経等の諸経ならびに

りゆうじゆばさつ　ろんもん　そうろう　いちぎようぜんじ　ひつじゆ　もうご

竜樹菩薩の論文いかんが候や。一行禅師の筆受の妄語、

ぜんむい　謀　こうぼう　けろん　じかく　りどうじしよう　どんらん

善無畏のたばかり、弘法の戯論、慈覚の理同事勝、曇鸞・

どうしやく　よぎようひき　ひとびと　しよけん　ごんきよう　ごんしゆう

道綽が余行非機、かくのごとき人々の所見は、権経・権宗

こもう　ぶつぼう　なら　そうろう

の虚妄の仏法の習いにてや候らん。「それほどにうらやま

しきよ　そうろう　やわ　つよ

しくもなき死去にて候ぞや」と、和らかに、また強く、

りようげん　ほそ　み　かおかたち　いろ　ととの　しず　ごんじよう

両眼を細めに見、顔貌に色を調えて閑かに言上すべし。

じよう　い　ひし　きようぎよう　とくやく　かず　あ　とううんぬん

状に云わく、「彼此の経々、得益の数を挙ぐ」等云々。

ふそく そろろ

「これ不足に候」とまず陳ぶべし。その後、「汝等が

しゅうじゅう えきよう さんぶつ しようじよう

宗々の依経に三仏の証誠これ有りや。いまだ聞かず。

たほう ふんじん おんきた そうら

ほとけ ほけきよう きた たま

よも多宝・分身は御来り候わじ。この仏は法華經に來り給

いちぶつにこん

おわ

そうろう

いしあいだ、一仏二言は、やわか御坐しまし候べき」と。

つぎ ろくなんくい きよう もん あ ほとけ

次に「六難九易、いかなる經の文にこれ有りや。『もし仏

めつ のち ひとびと ぎきよう し しゃくそん じつせつごじゅうねん

滅して後』の人々の偽經は知らず、釈尊の実説五十年の

せつぼう うち いちじいっく あ そうろう

説法の内には一字一句も有るべからず候」なんと立つべ

し。

ごひやくじんてん けんぼん あ

さんぜんじんてん けちえんせつぼう

五百塵点の顕本これ有りや、三千塵点の結縁説法ありや。

いちねんしんげ ごじつてんでん くどく

きようもん

と

たま

一念信解・五十展転の功德、いかなる経文に説き給えるや。

か よきよう いち に さん ないしじゅうくどく

な

彼の余経には一・二・三、乃至十功德すらこれ無し。

ごじつてんでん

と たま そうら

よきよう

いち に

五十展転まではよも説き給い候わじ。余経には一・二の

じんじゆ あ

ごひやく さんぜん

にじよう

じよう

塵数を挙げず。いかにいわんや五百・三千をや。二乗の成・

ふじよう りゅうちくげせん

そくしんじようぶつ

いま きよう

かぎ

けごん

はんにや

不成、竜畜下賤の即身成仏、今の経に限れり。華嚴・般若

とう しやだいじようきよう

あ

にじようさぶつ

はじ

こんきよう

あ

等の諸大乘経にこれ有りや。二乗作仏は始めて今経に在

てんだいだいしほど

みようてつ

こうぼう

じかく

むもん

り。よも、天台大師程の明哲の、弘法・慈覚のごとき無文

むぎ いつわ

たま

われ

おほ

そうろう

あくにん

無義の偽りはおわし給わじと我らは覚え候。また悪人の

だいば

てんどうこく

じようどう

ほけきよう

なら

きよう

提婆が天道国の成道、法華経に並んでいかなる経にかこ

れ有りや。あ

しかりといえども、万の難を闇いて、いかなる経にか

じつぽうかい

かいえとう

そうもくじようぶつ

あ

てんだい

みようらく

十法界の開会等、草木成仏これ有りや。天台・妙楽の

ちゆうどう

みみ

まど

こころ

おどろ

「中道にあらざることなし」「耳を惑わし心を驚かす」

しやく

じかく

ちしよう

りどうじしよう

いけん

るい

の釈は、慈覚・智証の理同事勝の異見にこれを類すべく

そうろう

てんだいとう

さんごくでんとう

にんし

ふげんかいほつ

しやうし

候や。すでに天台等は三国伝灯の人師、普賢開発の聖師、

てんしんはつめい

ごんじや

きやうろん

いつわ

しやく

たま

天真発明の権者なり。あに経論になきことを偽り釈し給

わんや。

かれがれ

きやうぎやう

いちだいじ

あ

きやう

彼々の経々にいかなる一大事かこれ有るや。この経に

にじゆう だいじ

ごひやくじんてんけんぽん じゆりよう

は二十の大事あり。なかんずく、五百塵点頭本の寿量にい

と たま

ひとびと おぼ

そうろう われ

かなることを説き給えるとか人々は思しめし候。我らが

ぼんぷ

むし いらいしようじ

くてい じんりん

ぶつどう

ひがん

ごとき凡夫、無始已来生死の苦底に沈輪して仏道の彼岸を

ゆめ

し

しゆじようかい

むさ ほんがく

さんじん

な

まこと

夢にも知らざりし衆生界を、無作本覺の三身と成し、実に

いちねんさんぜん

ごくり

と

せんじん

た

一念三千の極理を説くなんと浅深を立つべし。ただし、

こうじよう

わたくし

もんちゆう

公場ならばしかるべし。私に問註すべからず。たしか

ほうもん

なんだち

もの

ひと

ざ

ひ

にこの法門は、汝等がごとき者は人ごとに座ごとに日ごと

だん

さんぜしよぶつ

おんばち

こうむ

にちれん

に談ずべくんば、三世諸仏の御罰を蒙るべきなり。日蓮

こしよう

つね

もう

己証なりと常に申せし、これなり。

だいにちきよう

あ

じようどさんぶきよう

じようぶつ

このかた

大日経にこれ有りや。浄土三部経の「成仏してより已来、

じつこう

ふ

るい

ぜんご

もんみだ

およそ十劫を歴、これに類すべきやなんど、前後の文乱れ

いちいち

え

ず、一々に会すべし。

のち

い

しよにん

すいりよう

そうら

その後、また云うべし。「諸人は推量も候え、かくのご

おんきよう

そうら

たほうおんらい

しようじよう

とくいみじき御経にて候えばこそ、多宝遠来して証誠

くわ

ふんじんらいじゆう

さんぶつ

おんした

ぼんてん

つ

ふこもう

を加え、分身来集して三仏の御舌を梵天に付け不虛妄とは

ののし

たま

じゆせんがいしゆつげん

じよくあくまつだい

とうせい

訃らせ給いしか。地涌千界出現して、濁悪末代の当世に

べつふぞく

みようほうれんげきよう

いちえんぶだい

いつさいしゆじよう

と

つ

たも

別付嘱の妙法蓮華経を一閻浮提の一切衆生に取り次ぎ給

ほとけ

ちよくし

はちじゆうまんおく

しよだいぼさつ

や

うべき仏の勅使なれば、八十万億の諸大菩薩をば『止み

ね。善男子よ』と嫌わせ給いしか」等云々。

ぜんなんし  
きら

か  
じゃしゅう  
もの

たま

なら

とううんぬん

しょうもん

また彼の邪宗の者どもの習いとして、あながちに証文

たず

あ

ゆじゅつぽん

もんぐ  
く  
き  
く

を尋ぬることこれ有り。涌出品ならびに文句の九、記の九の

ぜんさん  
ごさん

しゃく  
い

にちれん  
もんけ  
だいじ

前三後三の釈を出だすべし。ただ日蓮が門家の大事これに

しかず。

しよしゅう

ひと

だいろん

じほうあいぜん

もん

もんなん

また諸宗の人、大論の「自法愛染」の文を問難とせば、

だいろん

たてど  
たず

のち

しゅうごんぼうじつ

かざい

りゅうじゅ

ぞんち

大論の立所を尋ねて後「執権謗実の過罪をば竜樹は存知

な  
そうら

よきよう

ひみつ

ほつけ

ひみつ

無く候いけるか。『余経は秘密にあらず。法華はこれ秘密な

おお

たと

だいやくし

きよう

り』と仰せられ、『譬えば大薬師のごとし』とこの経ばかり

じようぶつ

しゆし

さだ

く

かえ

じほうあいぜん

あくどう

り成仏の種子と定めて、また悔い返して、『自法愛染は悪道

お

まぬか

おお

そうろう

に墮つることを免れず』と仰せられ候べきか。さてあら

ふつこ

しろうじき

ほうべん

す

よきよう

いちげ

う

ば、仏語には『正直に方便を捨つ』『余経の一偈をも受け

ほけきよう

じつこ

おお

いはい

ざれ』なんと法華経の実語には大いに違背せり。よも、さ

そうら

まつぼう

とうせい

じこくそうおう

ほけきよう

にては候わじ。もしは、末法の当世に時剋相応せる法華経

ぼう

こうぼう

どんらん

ふほうぞう

ろんじ

しやくそん

を謗じたる弘法・曇鸞などを、付法蔵の論師、釈尊の

ごきもん

たも

ぼさつ

かんち

しる

御記文にわたらせ給う菩薩なれば、鑑知してや記せられた

ろんもん

おぼつか

欺

ごへん

る論文なるらん、覚束なし」なんとあざむくべし。「御辺や、

あくどう

お

まぬか

まつがく

いた

そうろう

『悪道に墮つるを免れず』の末学なるらん、痛ましく候。



みらいむしゅこう

にんずう

た

『未来無数劫』の人数にてやあるらん」と立つべし。

りっしゅう

りょうかん

い

ほうこうじどの

そじよう

たてまつ

また律宗の良観が云わく、法光寺殿へ訴状を奉るそ

じよう

い

にんしろう

としごろなげ

い

とうせい

にちれんほつし

の状に云わく「忍性、年来歎いて云わく、当世、日蓮法師

ものよ

あ

さいかい

だごく

うんぬん

せん

といえる者世に在り。『斎戒は墮獄す』云々。詮ずるところ、

きようろん

あ

いち

い

とうせい

いかなる経論にこれ有りや」へこれ一。また云わく「当世、

にほんこくじようげ

たれ

ねんぶつ

ねんぶつ

むけん

ごう

うんぬん

日本国上下、誰か念仏せざらん。『念仏は無間の業』云々。

きようもん

たし

しょうもん

にちれんぼう

たい

これいかなる経文ぞや。慥かなる証文を日蓮房に對して

き

に

そう

てい

にぜんとくどう

うむ

これを聞かん」へこれ二。総じて、これ体の爾前得道の有無

ほうもんろつかじよううんぬん

の法門六箇条云々。

すいち

ごくらくじりようかん

いぜん

にちれん

しかるに、推知するに、極楽寺良観が已前のごとく日蓮

あいあ

しゅうろんあ

よしののし

あ

めやす

に相値つて宗論有るべきの由訶ることこれ有らば、目安

あ

ごくらくじ

たい

もう

それがし

し

そうろうもの

を上げて極楽寺に対して申すべし。「某の師にて候者は、

い

ぶんえいはちねん

ごかんき

こうむ

さしゅう

うつ

たま

のち

去ぬる文永八年に御勘気を蒙り、佐州へ遷され給いて後、

おな

ぶんえいじゅういちねんしょうがつ

ころ

ごめんきよ

こうむ

かまくら

かえ

同じき文永十一年正月の比、御免許を蒙り鎌倉に帰る。

のち

へいのきんぎ

たい

ようよう

しだいもう

ふく

たま

その後、平金吾に対して様々の次第申し含ませ給いて、

かいのくに

しんざん

と

こ

たま

のち

しゅじよう

甲斐国の深山に閉じ籠もらせ給いて後は、いかなる主上・

によういん

ぎよい

やま

うち

い

しよしゅう

かくしや

女院の御意たりといえども山の内を出でて諸宗の学者に

ほうもん

よし

おお

そうろう

でし

法門あるべからざる由、仰せ候。したがって、その弟子に

じやくはい

そうら

し

にちれん

ほうもん

きゆうぎゆう

いちもう

若輩のものにて候えども、師の日蓮の法門、九牛が一毛

まな

およ

そうろう

ほけきよう

つ

ふしんあ

をも学び及ばず候といえども、法華經に付いて不審有り

おお

ひと

たま

ぞん

そうろう

い

と仰せらるる人わたらせ給わば、存じ候」なんと云つて、

のち

ずいもんにどう

ほうもんもう

その後は随問而答の法門申すべし。

さきのろつかじよう

いちいち

なんもん

もう

また前六箇条、一々の難門、かねがね申せしがごとく、

にちれん

でしとう

おくびよう

かな

かれがれ

きようぎよう

日蓮が弟子等は臆病にては叶うべからず。彼々の経々と

ほけきよう

しようれつ

せんじん

じようぶつ

ふじようぶつ

はん

とき

にぜん

法華經と、勝劣・浅深、成仏・不成仏を判ぜん時、爾前・

しやくもん

しやくそん

もの

かず

迹門の釈尊なりとも物の数ならず。いかにいわんや、そ

いげ

とうがく

ぼさつ

ごんしゆう

もの

の以下の等覺の菩薩をや。まして權宗の者どもをや。

ほけきよう　もう　だいぼんのう　くらい　たみ　くだ　きちく　くだ

法華經と申す大梵王の位にて、民とも下し鬼畜なんどと下

とがあ　こころえ　しゅうろん

してもその過有らんやと意得て、宗論すべし。

か　りつしゅう　もの　はかい　さんせん　くず

また、彼の律宗の者どもが破戒なること、山川の頽るる

むかい　じょうぶつ　おも　にんてん　しょう

よりもなお無戒なり。成仏までは思いもよらず。人天の生

う　みょうらくだいしい　いっかい　たも　にんちゅう

を受くべしや。妙樂大師云わく「もし一戒を持たば、人中

しょう　う　いっかい　やぶ　かえ　さんず　お

に生ずることを得。もし一戒を破らば、還つて三途に墮つ」。

ほか　さいほうきよう　しょうほうねんぎやうとう　せいほう　あごんぎやうとう

その外、齋法經・正法念經等の制法、阿含經等の

だいしようじようきよう　さいほう　さいかい　いま　りつしゅう　にんしょう　いっとう

大小乗經の齋法・齋戒、今ほどの律宗・忍性が一党、

たれ　いっかい　たも　かえ　さんず　お　うたが

誰か一戒をも持てる。「還つて三途に墮つ」は疑いなし。

もしは無間地獄にや落ちんずらん、不便な<sup>た</sup>んど立てて、

ほうとうほん

じかいぎようじや

ののし

宝塔品の「持戒行者」、これを旨るべし。

のち

その後、やや有<sup>あ</sup>つて、「この法華經の本門の肝心・

みようほうれんげきよう

さんぜ

しよぶつ

まんぎようまんぜん

くどく

あつ

妙法蓮華經は、三世の諸仏の万行万善の功徳を集めて

ごじ

ごじ

うち

まんかい

くどく

おき

五字となせり。この五字の内にあに万戒の功徳を納めざら

ぐそく

みようかい

いちどたも

のち

ぎようじややぶ

んや。ただし、この具足の妙戒は、一度持つて後、行者破

やぶ

こんごうほうきかい

もう

らんとすれども破れず。これを金剛宝器戒とや申しけん」

た

さんぜ

しよぶつ

かい

たも

ほつしん

ほう

なんど立つべし。三世の諸仏は、この戒を持つて、法身・報

しん

おうじん

むしむしゆう

ほとけ

な

たも

身・応身な<sup>しん</sup>んど、いずれも無始無終の仏に成らせ給う。こ

しよきよう なか

ひ つた

てんだい

れを「諸教の中においてこれを秘して伝えず」とは天台

だいし か たま いま まつぼうとうせい うち むち ざいけ しゅつけ

大師は書き給えり。今、末法当世の有智・無智、在家・出家、

じようげばんにん みようほうれんげきよう たも せつ しゅぎよう

上下万人、この妙法蓮華經を持つて説のごとく修行せん

ぶっか え

けつじよう うたが

に、あに仏果を得ざらんや。さてこそ、「決定して疑いあ

めつごじよくあく ほけきよう ぎようじや じようはん

ることなけん」とは、滅後濁悪の法華經の行者を定判せ

たま さんぶつ じようはん も ごんしゅう ひとびと

けつじよう

させ給えり。三仏の定判に漏れたる権宗の人々は、決定

むけん

かい にぜん

して無間なるべし。かくのごとくいみじき戒なれば、爾前・

しやくもん しゃかい いまいちぶん くどく な くどく な いちにち

迹門の諸戒は今一分の功德なし。功德無からんに一日の

さいかい むよう ほんもん かい ひろ たま

齋戒も無用なり。ただし、この本門の戒の弘まらせ給わん

かなら ぜんだいみもん だいずい

には、必ず前代未聞の大瑞あるべし。いわゆる、正嘉の地動、

ぶんえい ちようせい

とうせい ひとびと

文永の長星、これなるべし。そもそも当世の人々、いずれ

しゅうじゅう

ほんもん

ほんぞん

かいだんとう

ぐつう

ほとけ

めつご

の宗々にか本門の本尊・戒壇等を弘通せる。仏の滅後

にせんにひやくにじゅうよねん

いちにん

そうら

にほんにんのうさんじゅうだいきんめい

二千二百二十余年に一人も候わず。日本人王三十代欽明

てんのう

ぎよう

ぶつぼうわた

いま

しちひやくよねん

ぜんだいみもん

だいほう

天皇の御宇に仏法渡つて今に七百余年、前代未聞の大法こ

くに

るふ

がっし

かんど

いちえんぶだい

うち

いっさいしゅじよう

の国に流布して、月氏・漢土・一閻浮提の内の一切衆生、

ほとけ

な

あ

がた

あ

がた

仏に成るべきことこそ、有り難けれ、有り難けれ。

いぜん

じゅう

まつぼう

きよう

ぎよう

しよう

みつ

そな

また已前の重、末法には教・行・証の三つともに備わ

れい

しようほう

とううんぬん

じゆ

だいぼさつ

れり。例せば正法のごとし等云々。すでに地涌の大菩薩・

じようぎようい

たま

けつちよう

だいほう

ひろ

たも

上行出でさせ給いぬ。結要の大法また弘まらせ給うべし。

にほん

かんど

ばんこく

いつさいしゅじよう

こんりんじようおう

しゅつげん

せんちよう

日本・漢土・万国の一切衆生は、金輪聖王の出現の先兆

うどんげ

あ

ざいせいしじゅうにねん

ほけきよう

の優曇華に値えるなるべし。在世四十二年、ならびに法華經

しやくもんじゅうしほん

ひ

と

たま

だいほう

ほんもん

の迹門十四品にこれを秘して説かせ給わざりし大法、本門

しようしゅう

いた

と

あらわ

たも

正宗に至つて説き顯し給うのみ。

りようかんぼう

ぎ

い

か

りようかん

にちれんおんごく

げこう

き

良觀房が義に云わく、彼の良觀が日蓮遠国へ下向と聞

とき

しよにん

む

いそ

いそ

かまくら

のぼ

ため

く時は、諸人に向かつて「急ぎ急ぎ鎌倉へ上れかし。為に

しゅうろん

と

しよにん

ふしん

は

じさん

きた

宗論を遂げて、諸人の不審を晴らさん」なんと自讃毀他す

よし

き

そうろう

かいほう

る由、その聞こえ候。「これらも戒法にてやあるらん」、



あながちに尋ぬべし。たずまた日蓮、鎌倉に罷り上る時は、門戸にちれん かまくら まか のぼ とき もんこ

を閉じて「内へ入るべからず」とこれを制法し、あるいは風と うち い せいほう かぜ

気ななど虚病して罷り過ぎぬ。「某は日蓮にあらず。そのけ こびよう まか す それがし にちれん

弟子にて候まま、少し言のなまり、法門の才覚は乱れがでし そうろう すこ ことば 訛 ほうもん さいかく みだ

わしくとも、律宗国賊替わるべからず」と云うべし。りつしゅうこくぞくか い

公場にして理運の法門申し候えばとて、雑言・強言・こうじよう りうん ほうもんもう そうら ぞうごん ごうごん

自讃気なる体、人目に見すべからず。浅ましきことなるべじさんげ てい ひとめ み あさ

し。いよいよ身・口・意を調え、謹んで主人に向かうべしん く い ととの つつし しゅじん む

し、主人に向かうべし。しゅじん む

さんがつにじゅういちにち

三月二十一日

さんみあじやりのごぼう

つか

三位阿闍梨御房へこれを遣わす。

にちれん

日蓮

かおう

花押